第２回　4/18　「エンタテインメントビジネス新世紀 ～激変する音楽ビジネスとデジタル映画・３Ｄの急成長～」

北谷 賢司（きたたに・けんじ）先生　　ワシントン州立大学メディア経営学教授

1980～年、日本テレビ放送網顧問として、海外への番組輸出や『鉄腕アトム』英語版 52 本の脚本制作を担当。
1984 年、ＴＢＳ顧問に就任し、米国法人ＴＢＳインターナショナル上席副社長、ＴＢＳメディア総合研究所社長を務める。
1987～年、後楽園スタジアム顧問を兼務。その後東京ドーム取締役兼米国法人社長として、同社の自主興業事業を 12 年間担当。
1999 年、ソニー㈱顧問に就任。
2001～年、ソニー㈱執行役員兼米国本社エグゼクティブ･バイス･プレジデントとして、映画、音楽を含む北米グループ企業のマーケティング統括責任者を務める。
2004 年、帰国。 ソニー㈱ エグゼクティブ･アドバイザー、ぴあ㈱ 取締役、㈱ローソン 顧問、㈱東京ドーム エグゼクティブアドバイザー、㈱オークローン マーケティング最高顧問を経て、現在に至る。
その他兼任 ： 金沢工業大学虎ノ門大学院 教授、インディアナ大学経営大学院 上級顧問、
インターナショナル･テレビジョン･アカデミー財団 理事、
(社団)日本ビーチテニス協会 コミッショナー、国際バレーボール協会 会長顧問

《講義概要》

世界のエンタテインメント産業に携わり、現在はワシントン州立大学メディア経営学教授である北谷賢司氏が、ライブ・エンタテインメント産業や映画産業におけるエンタテインメントビジネスの今後について講義を行った。

講義前半では、まず、日本及び北米の音楽産業の歴史や現状を詳細なデータをもとに説明。さらに、カジノ産業におけるマカオの成長を例に、ライブ・エンタテインメントの今後について述べた。講義後半では、撮影技術の進歩に伴う映画産業の変化を具体的に紹介。音楽産業、映画産業の今後についてビジネスの視点から解説し、エンタテインメントのビジネスとしてのあり方を示した。

受講生は、「今、何をするか」を大事にし、常に新しいことを考える北谷氏の姿勢から、歴史や現状を正しく理解した上で、先を見据え、今求められているものを模索することの重要性も学んだ。

《受講生の感想》

●これまでの歴史を振り返るだけでなく、現在のお話やこれからのお話などを聞けおもしろかったし、ますます興味がわいた。最後の、「ビジネスと自分の意見や趣味は分離して考えなければビジネスは成立しない」という言葉が印象的だった。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●北谷先生はアメリカで教授をされているということもあって、世界のメディア情勢も絡めて講演して下さるので、広い視野でメディア産業を見つめることができました。ライブエンタテインメントビジネスはやはり、欧米が強いということを教えていただいたので、これからはそちらにも目を向けて勉強していきたいと思いました。

京都女子短期大学・2 回生

●常に話題が現在より先を行っていて、過去のことも現在のためのステップとしての話だったので、とてもおもしろかったです。1 時間 30 分なのに、とても凝縮されていて、３つの授業を別々に聞いたようでした。どの産業の話も、これからの展望など、ずっと先を見据えた話なので、自分の職業を考えるにあたってとても参考になりました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●エンタテインメント産業は常に動いていて、“今”何をやっているのかが重要というお言葉が印象的でした。自分はまだ２年生ですが、もっと“今”の日本のエンタテインメントについて勉強しなくてはならないと実感しました。

同志社女子大学・表象文化学部・2 回生

●「人を楽しませたい！」「喜びを与えたい」という思いだけではビジネスという角度では発展しない、そのことは時代の流れを追ううえで、十分に理解したつもりだったが、映画や音楽でビジネスとして発展するうえで他のコンテンツとの差別化、そのうえで技術の革新が求められているようだと講義で感じた。しかし、どんなに技術が進もうと大切なのは作品そのもののクオリティや想い、であって欲しいと思う。

龍谷大学・社会学部・4 回生

●私は市場に出回っているものを消費者の立場の目でしか考えていなかったので、今日は経営側のビジネスの視点を考える機会になりました。メディアは楽しませると同時にビジネスなので、更によいものが求められ、新しい発想が大切だと思いました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生